View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository

我々にとって“役に立つもの”と“役に立たぬもの”

高　畑　由起夫

聖書には農耕と牧畜に触れた譬えがしばしば使われます。『マタイによる福音書』13 章 24〜30 節でキリストは、麦と毒麦を譬えにして「芽が出たばかりの時に、毒麦を抜こうとすれば、麦も抜いてしまうかもしれない。成長すれば、選り分けることができる」と諭します。この教えには誰でも納得することでしょう。

今日とりあげるテーマは、この言葉に直接関わるものではありません。この譬えからの連想として、我々が役に立ちそうにない／顔も見たくない生き物に、つい“毒草”、“雑草”、“害虫”等のラベリングする（レッテル貼り）ことです。とは言え、これらの生き物は『広辞苑』の「雑草」の項に、「たくましい生命力のたとえに使うことがある」とあるように“しぶとさ”も備えています。生命の歴史 30 億年を振り返れば、ヒトと害虫や雑草とのつきあいはせいぜい 4,500 万年、我々がえらそうに「雑草・害虫」と呼んでも、なかなか手に負えるものではありません。

ところで、毒麦が嫌われるのは、バッカクキン科の細菌感染で神経毒ができるからです。つまり、自分で毒を出すわけではないのに、嫌われる。と言えば、毒麦にとって理不尽のようにも思えますが、実際には毒麦にもちゃんと利益があるかもしれない。その毒で捕食者から身を守る“共生”かもしれないのです。さらに、この毒からは幻覚剤 LSD が得られます。もし、こうした“毒”が病いに効けば、嫌われるはずの“毒草”もめでたく“薬草”に昇格することもしばしばです。しかし、精神治療薬として期待された LSD は禁止薬物にとどまり、毒麦が薬草になることはありませんでした。

ここまで説明すれば、雑草や害虫とは「人間からのラベリング」に過ぎず、状況が変わると「手のひらを返すようにもてはやす」ことも理解できるでしょう。そして、こうしたラベリングが（“マイノリティ”等に対するように）人間同士の差別にもつながりかねないことも。

それでは、どんな結論を下すべきでしょう？　ヒューマン・エコロジーを視座に創られた総合政策学部で言えることはただ一つ、「皆さんは“真実”を愛していますね？」、そして「我々は見たくない真実まで見えてしまうことを許容しなければなりません」。これは「目の前の真実を見すえよう」と説くキリストの言葉に通じるかもしれません。

（総合政策学部長）